**「皆の母、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー」**

2021年10月23日

スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダジ

於：青梅リトリート

母は愛と慈悲の象徴です。我が子に対する母の愛は、人類の愛の中で最も純粋といえるでしょう。私たちが神への愛を深めたいなら、神との愛しい関係を築かなければなりません。私たちは神を自分だけのもの、自分の全てにしたいので、神を父、母、友達とみなすことから始めます。

ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーを自分の母である、と想像する必要はありません。なぜならホーリー・マザーは全ての子供の本当のお母さんだからです。ホーリー・マザーご自身がこのようにおっしゃいました。「私はあなたたちのお母さんですよ。養母ではなく本当のお母さんです。だからあなたが苦しんでいるときはいつでも『私にはお母さんがいる』と自分自身に言い聞かせなさい」

ホーリー・マザーのイメージを心に描くとき最初に思い浮かぶ特徴は、慈悲深さです。子供のころからサラダマニ（サーラダー・デーヴィー）には母のような心があらわれ始めました。飢饉がベンガルを襲ったとき、ホーリー・マザーの父親ラームチャンドラ・ムコパッダエはキチュリ［インドの食べ物］を村人たちに配ることにしました。熱々のキチュリが皿に盛られると、幼いサーラダーはキチュリが早く冷めるように、うちわで皿をあおいだそうです。

**師の弟子のお母さん**

シュリー・ラーマクリシュナが存命中、ドッキネッショルでホーリー・マザーは師の弟子たちのお母さんとして知られていました。弟子たちの好みの応じてさまざまな種類の料理を作ることもしました。ある晩、ホーリー・マザーはバーブラーム・マハーラージ（スワーミー・プレマーナンダジー）にチャパティ［インドのパン］を多めによそったのですが、それを見たタクール（シュリー・ラーマクリシュナ）が、霊性の求道者が夜にそんなにたくさん食べるもんじゃないよ、と不平をおっしゃいました。するとホーリー・マザーは「私が我が子の責任を負います」と返事をしました。

スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）はシカゴへ発つ前にマザーの祝福を熱心に求めました。そして西洋からインドに凱旋したときには、五体投地でマザーにご挨拶をして言いました。「お母さん、あなたの恩寵のおかげで、師のメッセージを白人の国で説くことができました」

師が亡くなった後、ホーリー・マザーはさまざまな場所に巡礼に行きました。その頃、師の出家弟子たちはとても厳しい苦行生活を送っており、日々の食べ物に困ることもたびたびありました。ホーリー・マザーは師の子供たちが施しを乞うために家々をまわることが耐えられなかったので、さまざまな寺院の全ての神々に、師の子供たちが生きていくために必要な食べ物と必需品が得られますように、といつも祈りました。

ホーリー・マザーはシュリー・ラーマクリシュナの出家弟子だけのお母さんではありません、ホーリー・マザーの母の愛は、全ての信者、信者でない者、教養のある者、ない者、上位カーストの者、下位カーストの者、さらには道徳の道を外れた者に対してまでも向けられました。ホーリー・マザーは東洋人、西洋人、また、人間だけでなく動物のお母さんだったのです！

ホーリー・マザーの母性を物語る話をいくつかします。

**病気で苦しむ僧侶の看護**

ラジェン・マハーラージは、コアルパラ［ジャイラーンバーティーの隣村］のラーマクリシュナ・ヨーガアシュラマの僧院で働いていました。ある時、マハーラージがジャイラーンバーティーにやってきてホーリー・マザーに、アシュラム長との衝突が大きくなったのでヴァーラーナシーにしばらく行きたい、という願いを伝えました。ホーリー・マザーはそれを聞いてラジェン・マハーラージにしばらくジャイラーンバーティーに滞在するように言いました。ホーリー・マザーは朝のプージャの後に、毎日シャーベット（粒アメのシロップ）と朝食を摂っていました。ラジェン・マハーラージがジャイラーンバーティーに来ると、ホーリー・マザーは毎日礼拝のあとに彼を自室に呼んで、ご自分はシャーベットを少しだけ飲み、残りを全てラジェン・マハーラージにあげました。シャーベットはマザーの健康のためにとても大事なものでしたので、ラジェン・マハーラージは、そんな大事なものをいただくわけにはいかないと、最初はかたくなに飲むのを断っていたのですが、ホーリー・マザーの愛の力に屈して、シャーベットをいただくようになりました。

その頃セヴァク・ブラフマチャーリはジャイラーンバーティーでホーリー・マザーの家族のお世話をしていたのですが、ホーリー・マザーがラジェン・マハーラージにシャーベットをあげていることに気づきました。そこでホーリー・マザーはブラフマチャーリ・セヴァクを片隅に呼び、状況を静かに説明しました。「ラジェンはコアルパラでの料理の雑多な仕事のせいで頭がカッカしていて、それでアシュラムの偉い人たちと困ったことになっているの。このシャーベットはラジェンの頭を冷やすのにとてもいいのよ」ホーリー・マザーはご自分の健康のことはそっちのけで、愛をもってお世話することで、弟子の問題を解決したのです。

ギャン・ブラフマチャーリはホーリー・マザーのもう一人の出家弟子で、同じくジャイラーンバーティーに滞在していました。ギャン・ブラフマチャーリは疥癬がひどくなり、痛すぎて自分の手で食べることもできませんでした。その時ホーリー・マザーは、彼の皿の料理を混ぜて、少しずつご自分の手でギャン・ブラフマチャーリに食べさせました。

**インドの信者、外国人両方の母**

ホーリー・マザーは本当に皆の永遠の母でした。彼女の子供の中にはインド人だけでなく外国人の子供もいました。サラ・ブル、ジョセフィン・マクラウド、シスター・ニヴェディタ［スワーミージーの西洋の女性信者達］がホーリー・マザーとボセパラ街で面会をしたとき、マザーは彼女たちを愛情深く受け入れました。彼女たちと言葉は通じませんでしたが、マザーはハートからの言葉で会話をしました。ミス・マクラウドが通訳を通して食事をご一緒したいと申し出ると、マザーはそれに同意しました。当時ヒンドゥ教にはとても厳しいルールがあり、ヒンドゥ教徒の未亡人が西洋人と食事を共にすることは簡単なことではありませんでした。しかし、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの言葉「愛は恐れを知らない」という言葉通り、ホーリー・マザーのあふれんばかりの愛情はカーストの全制約を打ち破りましした。

ホーリー・マザーが彼女たちと食事を共にすることで、西洋の信者もヒンドゥ社会の一員であるということを示したのです。ホーリー・マザーはシスター・ニヴェディタのことを愛情を込めて少女を意味する「クキ」と呼び、ジョセフィン・マクラウドのことは「ジャヤ」と呼びました。

**雑用人に対する親切**

チャンドラ・モハン・ダッタは東ベンガルのある村からコルカタにやってきて、仕事を求めて街を歩き回っていました。やっとのことでウドボダンで職を得て、そこで雑用人として働くようになりました。

ウドボダンで出版された本を他で売ることで臨時収入も入るようになったので、少しずつ彼の経済状況は好転していきました。しかし、幸運から悪運です。彼の故郷の家が洪水で流され、家族は路上に投げ出され、ひどい状況に置かれている、という知らせを受けたのです。彼は心配と不安で胸が張り裂けそうでした。そのことを知ったホーリー・マザーは彼に300ルピーを渡し、郷里にもどって家を手に入れ、そこに家族を住まわせるように言いました。

このことは、雑用人すらもホーリー・マザーの愛する子供の一人であった、ということのほんの一例です。後に、チャンドラ・モハンは目に涙をため、感動で声を詰まらせながら、この話をしたそうです。

ホーリー・マザーの家族が増えたので、ある人がホーリー・マザーに牛乳を搾るようにと牝牛を寄付しました。そこでゴーヴィンダという名前の孤児が牛の世話をするために雇われました。彼はしっかりと自分の仕事をしていたのですが、数日経つと疥癬がひどくなり、治療をしても良くなりませんでした。ある夜、病気はとても深刻になり、ゴーヴィンダはひどい痛みで泣き叫びました。次の日の朝早く、ホーリー・マザーはターメリックとニームという特別な葉で軟膏を作り、ゴーヴィンダにそれをどうやって肌につけるかを教えました。マザーのこの個人的なお世話でゴーヴィンダは大いに慰められ、彼の顔は喜びに輝きました。

私たちは、卑しい職業の人が困っていても無視することが多いのですが、ホーリー・マザーは家族の使用人に対しても、愛をもって接したことにとても心が打たれます。

**人類と動物のお母さん ！**

シュリー・クリシュナはバガヴァッド・ギーターの中でこう言いました：

おおアルジュナよ、私は一切生類の胸に真我（魂）として住んでいる。また、私は万物万象の初めであり、中間であり、そして終わりである。

私は、馬の中では甘露酒（アムリタ）の海から生まれたウッチャイシュラヴァである。巨象の中ではアイラーヴァタ、また人びとの中では王である。

牛の世話係のゴーヴィンダの続きです。ある時、こんなことがありました。牛が哀れっぽい声でないています、どこかがとても痛いようです。鳴き声を聞いた家族のだれもが不安になりました。ホーリー・マザーは牛に近づくと、両手で牛を抱きしめて、我が子にするように、牛のへそのあたりを撫でました。それでその牛は救われたのです。

ガンガラムという名前の九官鳥がいました。九官鳥は音真似がとても上手く、人の言葉もそっくりに真似ることができます。時々ガンガラムは「マー、オー、マー（お母さん、お母さん）」と鳴きました。そんなときホーリー・マザーはそれに答えて、穀物をガンガラムの前においてやりました。

またある時、ホーリー・マザーの家の飼い猫が死にました。ホーリー・マザーは猫が死んでから13日目後に僧侶たちを招いてごちそうをふるまい、僧侶たちは賛歌を歌いました。［インドでは人が死んで13日目に特別な儀式がある］

**犯罪者や道徳的な道から逸れた人びとの母**

師の直弟子のひとりが、ある信者の行為に腹を立て、その信者をマザーの近くに来させないようにしてください、とホーリー・マザーにお願いしました。しかしマザーは言いました。「もし自分の息子がほこりや泥にまみれていたら、全ての汚れをふき取って、膝の上にのせてやるのが私のつとめです」

ベルル・マトで一人の労働者がお金を盗んだので、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは彼を追放しました。その男はどうしようもなくなって、ホーリー・マザーが滞在していたウドボダンに駆け込みました。全てを聞いたホーリー・マザーはその男に、2，3日私の家にいなさい、と言いました。数日後、ホーリー・マザーはスワーミー・プレーマーナンダジーを呼んで、彼がお金を盗んだのは貧乏がそうさせたのですよ、と言ってその男をもとの仕事に戻すようにと言いつけました。出家僧は時々、在家の人の苦しみを理解できないことがあります。プレーマーナンダジーは、しかしスワーミージーが怒っているのです、とホーリー・マザーの言いつけに難色を示しました。するとホーリー・マザーは「私が彼を連れて帰りなさいと言っているのよ」と強く言いました。全ての経過を聞いたスワーミージーは彼をもう一度雇うほかありませんでした。

**自分のお母さんに似ている**

ラシェベハリ・マハーラージは幼少時に母を亡くしたので、心には常に孤独感がありました。ラシェベハリ・マハーラージがホーリー・マザーに初めて会ったとき、まるでお母さんが自分を抱きしめようと待っていたかのように感じました。そしてホーリー・マザーとの出会いがラシェベハリ・マハーラージの人生を永遠に変化させました。

自分の母に見た目の特徴が似ていることを見つける信者も多くいました。初めてホーリー・マザーに会ったときに、目の前に自分のお母さんが座っているかのように感じた信者もいるほどです。

多くの信者がホーリー・マザーに初めて会ったとき、マザーはまるでずっと前からの知り合いのように受け入れてくださることに衝撃を受けました。だからすぐに当初のためらいはなくなりました。

ある時、ラシェベハリ・マハーラージは用事で別の村に行き、午後も遅くなってから戻りました。驚いたことに、ホーリー・マザーはまだ昼食をとっていませんでした。ラシェベハリ・マハーラージが、なぜ先に食べてくださらなかったのですか、と抗議をすると、「我が子よ、どうしてあなたが食べていないのに食べることなんてできるかしら」と言いました。大慌てでラシェベハリ・マハーラージが素早く昼食を終えると、やっとホーリー・マザーと同席の女性たちも食べました。

**結び**

疑問がわきます。人間の母とホーリー・マザーとはどう違うのだろうか？ また、人間の母はホーリー・マザーが子供たちを愛したように我が子を愛せるだろうか？

人間の母の心にはほんの少しの私欲がありますが、ホーリー・マザーの愛には全く不純なものがありません。ホーリー・マザーの心は「至福が水差しに満ちている」状態で、その愛は、見返りを求めることなく、ただただあふれ出たのです。彼女は「愛」の具現でした。

一般的な母は通常、我が子をよその子よりも愛します。しかし、ホーリー・マザーの愛は皆に平等でした。そして、一般的な母とは異なり、愛がとても深いにもかかわらず、いかなる執着もありませんでした。

さらに、ホーリー・マザーは今生の母というだけでなく来生の母でもあります。

人間の母には限界があるので、我が子の望みを全てかなえてやることはできません。人間の母はある限度までは我が子を世話したり大事にできますが、ホーリー・マザーは全能です。マザーは全ての望みと必要なことを解脱も含めて与えてくださいます。人間の母性が解脱を授けることはできますか？ 絶対にできません。

ホーリー・マザーは私たちの人生の一部分でもあると理解することは非常に重要です。ホーリー・マザーを祭壇に飾るだけなく、寝室、台所、また私たちが使うさまざまな場所にも居ていただきましょう。孤独を感じたり、意気消沈したときにはいつでも、完全に信頼してホーリー・マザーに心を向けましょう。そうすればホーリー・マザーは私たちの心に強さと勇気を与えてくださいます。ホーリー・マザーの言葉を思い出しましょう。「苦しい時にはいつでも『私にはお母さんがいる』というだけでいいのよ」